

1. 研究目的

現在の日本における食生活での危険性(農薬や添加物等)に対する意識を持つ必要性があるということを、絵本を媒体に示唆する。一見食生活においては安全のように感じる日本であるが実際抱える問題は少なくない。添加物、農薬における問題は決して軽視できる内容では無い。直接的に「死」をイメージできない方も多と思われるが現状を維持していれば後に被害がでる可能性もある。現在も発がん、臓器不全、妊娠における悪影響など様々な影響がでている。これには企業の利益第一といったような方針や政府の不備、国家間のしがらみ、そしてなにより私たちの意識の低さが問題の原因である。国や企業レベルの問題改善を促す、試みるというのは個人の力では不可能に近い。しかし私たちの意識を少しずつでも変えていくことは可能である。私たちの意識が高まりそれが体現されるような社会になれば企業や国も変えることができるかもしれない

2. 調査と分析

現在、日本がかかえる食の問題は少なくない。添加物はほとんどの食材にしようされており、農薬もまた例外ではない。直接的な問題以外にも諸外国などとのしがらみのような国際レベルの問題も存在する。

これら諸問題に対して食育教材は存在しているが、どれも説明的で読む意欲が起きず、印象にも残りにくい。そこで今回の卒業制作は絵本という形式をとることで、食育教材への興味の導入をスムーズにした。また作中での強いインパクトは読者の気持ちに訴えるものがあり。感情とともに意識として読者の頭にのこるのではないかと考えている。

3. コンセプトの立案

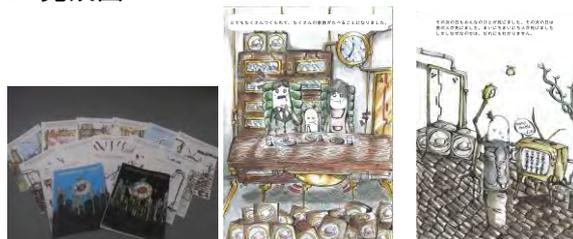
現在の日本における食の危険性を訴えるということを第一の目標として設定するにあたり「恐怖」と「抽象的」というのをコンセプトにすることにした。まず、「恐怖」というのは絵本を読むことによって恐怖を感じ強烈なインパクトを残す。そこから意識の改善につなげるきっかけにしようといった狙いがある。また、「抽象的」というのは農薬や添加物の説明、被害を説明的に書くのではなく、あくまで絵本として物語にのせて漠然とでも構わない、少しでもいから危機感をもってもらうといった方法のもとで抽

象的な内容からこの本は何を訴えているのか読者に能動的に考えてもらうことで、気付いたときにより高い意識をもってもらうといった狙いがある。

4. デザイン展開

架空の町を舞台に物語を設定し、人々の過ちと一つの食材によって町がほろんでいく様子を表現した。独特の世界観を構築し、無機質で寂しさを感じるようなイメージを設定した。初めは鮮やかに色があった世界が、だんだんと色あせて白と黒だけになっていくことで「破滅」「荒廃」を表現した。物語は架空の町を舞台に展開し、人々の過ちと一つの食材によって町がほろんでいく様を描く。

5. 完成図



6. 結論

行った検証方法は小学校に製本した作品を持っていき。調理員という食に関連深い方々の意見を頂く。ともに小学生とも密接な職場なので1~6年生を対象に可能な範囲で意見を頂く。その結果、大人子供ともにでた意見は「話が怖い」「キャラクターが可愛い」「話がユニーク」年齢が高い層からは「話が深い」という意見もあった。ネガティブな意見としては「漢字とひらがなが混ざっている」「作中の食べ物は何故、毒なのかいまいちピンとこない」などの意見を頂いた。コンセプトとした「恐怖」は全体的に感じてもらうことに成功した。対象年齢が高くなると「話が深い」などのように作品の狙いを考察している。このことから目的はおおむね達成できたと考える。

文献

[1]加賀一郎, “食の安全缶 ジーライブ”
<http://www.g-live.jp/index.html> (参照:2012-8-26)